

黒服の人びとが乗った車内は、静まりかえって、葬列のようだった。通勤時を過ぎていたにもかかわらず、詰め込まれたのは、特急列車が遅れたためだ。無言の密閉空間をただ耐えているのは少数で、大方は隙間で携帯に見入っている。駅に着くたびに、喪服の客は昇降のたびに無言で他者を押し飛ばしながら出入りする。立錐の人びとと、押しのけて我先に着座した人々とは、雲泥の差がある。苦痛の目の前で、ゲームに興じ、漫画を読む。傷病者、妊婦、高齢者への優先席でも、寝たふりを決め込み、譲る席はない。

「降ります。通してください。すみません。」などと声を出す人はほとんどいない。無言、力づくで押し出されると、瞬時、虚無的な怒りが沸く。いままでは何とか感情と体の防御や攻撃的な反応を抑えてきた。時には誰もが教養を保てはしない。

便利に蓋われた文明のいまわの際は不信の貨車に載せられて火葬場に運ばれていくようだ。もう人間の感情を封じ、ひたすら荷物になる。苦痛に耐えられなくなった人が、時に怪しい行為を溢し、粗暴な怒りを発する。やはりこの文明の行き着く葬列の先は火葬場であり、墓場なのだろうか。

通勤ラッシュに都会に向かうと、文明の終焉を妄想してしまうのだ。

人間の真文明は、焼かれる火炎のなかから、不死鳥のようによみがえるのだろうか。